第３回大阪狭山市教育振興基本計画策定委員会　議事要旨

日　時：平成 26 年３月 11 日（火）　午後３時 00 分～午後４時 50 分

場　所：大阪狭山市役所　協議会室

出　席：委員　今西委員長、新坊副委員長、安藤委員、山田委員、山村委員、松島委員、花田委員、田畑委員、小谷委員、竹口委員、車谷委員、柳委員
：事務局　橋上教育部長、谷こども育成室長、田中教育部理事、能勢教育総務グループ課長、上尾主幹、隅谷
：コンサルタント

次　第　１．開　会
２．審議事項（資料１）
大阪狭山市の教育や生涯学習に関する市民アンケートの結果について
３．その他
今後のスケジュール
・次回会議予定について
４．閉　会

１．開会

２．審議事項（資料１）

大阪狭山市の教育や生涯学習に関する市民アンケート【結果報告書】
事務局より、資料１に基づいて説明。

委員長：最初にお願いがある。次のプロセスを見据えて計画の柱になるようなことを頭に思い浮かべながら意見等をいただきたい。結果報告書のボリュームがかなりあるので、１から６まで順番に聞いていく。まず、Ｐ４～P11 の「１.回答者の属性」に関する意見、質問を出してほしい。

委　員：この結果報告書の配布や利用の仕方についてお聞きしたい。この委員会のみなのか、各方面に配布するのか。結果だけが一人歩きしたり、他の人に悪用されたりしないかと心配している。

事務局：今後、結果報告書の内容が変更になる可能性もある。基本的には、今までの委員会の議事録要旨や配布した資料は、全てホームページ上で閲覧できるように公開している。この結果報告書についても今回の委員会で指摘があれば修正し、委員の了解を得た上で、最終的には PDF 形式で公開していく予定である。

委　員：子育て世代とそれ以外の世代の分類はしないのか。

事務局：子育て世代として分析したいのがだいたい 30 代、40 代である。この方々を中心に子育て世代の意向を把握していきたい。

委　員：そうすると、28%ほどが子育て世代にあたるわけか。

事務局：世代としてはそうなる。子どものいない方もいるので、実際はもう少し減ると思う。

委　員：子どもの教育に関する部分が多いアンケートなのに、問７を見ると子のいない方が非常に増えており、子どもがいても大学生以外の成人が一番多いので、この結果をそのまま信用できかねる。教育中の子どもがいないのにそれに対して回答しているわけであるから、ニュースソースが非常に少ないのでは、と危惧している。

委員長：統計を見る上での１つの注意として指摘いただいた。

委　員：各年齢層での男女比は確認できないのか。教育問題なので女性のほうが興味を持って回答しているような気がするが。

事務局：データはあるので、次回報告書に加味する。

委員長：次に進む。Ｐ12～Ｐ23 の「２．大阪狭山市の就学前教育・保育や学校教育について」に関しての意見を求めたい。

委　員：回答に「わからない・知らない」「不明・無回答」が多いのに驚いた。現状を知らないことをどのように捉えれば良いのか、戸惑っている。

委　員：ある委員が言われていたように子どもを持っていない方や学生でない子どもを持つ方が多いことからすれば、就学前教育・保育や学校教育を終えてしまっているかまだ経験していない方に対して聞いているわけなので「わからない・知らない」「不明・無回答」の割合が高くなって当たり前だ。このアンケート結果を、現在子育てをしている方の回答として見るのはまずいと私は思う。

委員長：大変大事なところなので、絞り込みのクロスをかけてはっきりさせたい。事務局に詳細なクロス集計をお願いする。

委　員：アンケートの回収率は約 50%だが、それだけで全てを読み取れるのか。

事務局：500 人に調査したとする。「はい」と答えた方が 50%いたとしてそれを全体に帰したとき

に５万人のうちの５割が必ずしも「はい」と答えるとは限らない。標本誤差という言葉があるが、基本的に調査に関してはプラスマイナス５%の誤差が出る。今回の回収率の範囲で数字を見ていくことは可能だ。

委員長：1,000 サンプルを取ろうとして 506 だから悪くない結果だ。信頼性がある調査だと思って良い。ただ、調査はあくまで本来の仕事をしていく上での基礎的資料に過ぎないので少し批判的な視点を持っても構わないと思う。

委　員：問８のグラフだが「わからない・知らない」という回答が５割近くあり、５割を超えているものもある。残り半数の意見から流れを汲み取ることに関して問題はないと判断できるか。あまりにもサンプル数が少なくなり過ぎているのでは。506 人のうちの半分、約 250 人の意見を全体意見として捉えて大丈夫なのか不安になる。統計学的にはそういうものなのか。

事務局：統計学的にはこの 506 の中でお答えいただいた割合を全体に対して類推していく考え方になる。問８で学校教育が充実しているという回答が約 38%と出てきているが、これを大阪狭山市民全体に対して類推するとおよそこれくらいになると、このサンプル数では言うことができる。一方、教育の分野でもあるため、市民全体で考えると「わからない」と答える方もこれだけ出てくる形になる。だから「そう思う」と意思表示された方はこの割合だと推測できる。

委　員：わかった上で「そう思う」と答える方の割合がどれくらいか曖昧だ。市民全体の 38.4%が、学校教育が充実していると捉えている、と受け取るべきか。

事務局：そう思う。ただ、いろいろな情報提供も含めてご存知ない方もいるのでそういう方々に市の教育内容をよりわかっていただくと、この割合もまた変わってくるだろうと思う。

委員長：人口規模から行けば 506 というのは決して少なくない。信頼性のある数字だ。ただ、今指摘された面も考えて我々はデータを見ていく必要がある。

委　員：「わからない・知らない」という回答が多いので調査の信憑性が問われているが、学校で言えば市民に対する情報発信や情報提供は、保護者以外はなかなかわからない。ホームページがようやく立ち上がり、狭山の教育全般について情報発信ができるようになってきたが、市民全体に届いていないのではないか、と捉えている。

委員長：ここで課題が見えてきた気がする。学校教育について、全市民が知っているわけではないことが浮かび上がってきた。情報提供も含めた広報の課題もあるだろう。

委　員：高齢化が進んでいる現在、60 代、70 代の方が非常に多いので、教育について関心がな

く知らないのは当たり前だと思う。その方たちをいかに教育現場に引き寄せるかの取組みが必要では。

委員長：直接教育に関わっていない方をどう現場に引き込むかも課題として浮かび上がってきた。ぜひ計画のなかで活かしたい。

委　員：高齢化が進んで子育てを卒業されている方が多いから、半数以上が「わからない・知らない」という結果になったのだと思う。ただ、質問が子どもの教育に関することだけであったら、それらの方がこのアンケートに回答して送り返してくれたかが疑問だ。後ろのほうに生涯学習や市への愛着などの質問が載っているので、そちらの面を答えたいと思って記入して送ってくれたのだと推測している。

副委員長：50 歳以上の方の総計が 58%を超えているわけで、全体で５割近くが「わからない・知らない」「不明・無回答」であるのは、子育て世代から外れた方が過半数を超えているから無理もない話だ。ただ、例えば問 10 や問 11 は大阪狭山市の就学前教育・保育と学校教育に限定しての設問だが、ここで「わからない」「不明・無回答」が極めて少ないのは、学校教育の現状とは離れたところで一般論としてお答えになっているのだろうかとの疑問が湧く。子育て世代で大阪狭山市の学校と密接にかかわり、状況をかなりご存知の上でお答えになっている場合と、大阪狭山市に限定せず一般論としての意見が混在しているように思う。問 12 の「学校教育の中で力を入れて行う必要がある教育施策や教育事業」だが、ここも極めて「わからない」「不明・無回答」の割合が「二学期制による教育活動を行う」以外では低くなっている。この設問の頭には「大阪狭山市の」という限定がないが、ここも大阪狭山市の学校教育の現状を理解いただいていない中での一般論としての意見と、子どもさんが就学されていてご存知の上での意見が混在しているのではないか。その辺りを加味しながら見ていく必要がある気がする。

委員長：分析の視点として２つの見方を出していく必要があるという貴重なアドバイスをいただいた。それではＰ24～Ｐ31 の「３．家庭教育と地域教育について」に関する質問意見等ご自由に。やはり、あいさつから入るのが大事だと思った。学校で行われているあいさつ運動が全ての入り口だと感じている。

委　員：この狭山でスポーツをする機会をつくりたいと思っている人が多いと出ているが、安全に安心してスポーツできる場所がない。子どもを勝手に地域で遊ばせられない風潮がある。社会的な事件がいろいろあり、登下校時の見守り活動も強化していかなければならないと思う。

委員長：子どもの安全・安心な遊び場の部分だが、国の施策としては放課後の子どもの遊び場を学校の中と外の２つに分けている。安全・安心の問題について狭山はどうなのかという貴重な意見をいただいた。

委　員：地域で活動している中で高齢者の方から保護者に対する批判が結構出る。その証拠としてＰ25 で 60 歳以上の多くが「保護者が子どもに対する教育の方法や心がまえを学ぶ」ことが必要だと思っている。

委員長：Ｐ25 の年齢別の割合を見ると 60 歳以上の過半数が保護者に対して学びなさいと思っている。一方若い保護者の方々は相談にのってほしいと思っている割合が多く、すれ違いも感じられないことはない。とても面白いデータだと興味を持って拝見した。難しい問題だが、いずれにしても子どもが大事だという思いは一致しているはずだ。

委　員：問 16 で約７割の方が何らかの形で学校に対して協力的なのがわかり、驚いた。狭山はボランティア活動が盛んなまちでもあり、地域の方がそれだけ地域の子どもに対して興味や関心があるのだと感じた。また、問 17 では「出会ったときは、あいさつをする」「出会ったときは、声をかけ、話をする」「悪いことをしているところを見かけたときは、注意する」割合も結構多いとわかり、子どもたちを見ようという姿勢の方が狭山に多いのがすごく喜ばしい。

委員長：良い数字だと思う。大阪狭山市の皆さんは非常に協力的で、嬉しいことだと感じている。

委　員：１４年くらい前に富田林から狭山に引っ越してきたが、登下校時の見守り活動があるのに驚いた。すごいと思った反面、そこまですると子どもが自立できないのではないかと懸念したが、ここ数年間で登下校中の事件が起こったりしたので、このような見守りが大事だと痛感した。それと、先ほど７割の方が学校の活動に協力的であるというお話があったが、自治会がしっかりしている地域なので、そういった活動にも積極的なのだと思う。公民館活動をしっかり行っている地域は特に子どもとのふれあいを取り入れているので、世代間交流ができているのではないだろうか。

委員長：保護の問題と自立の問題の二律背反的なものもあるとの指摘を受けたが、安全・安心の確保がとても良いといったことと、地域の自治活動が大切で、それが学校への協力に結びつくのでは、という貴重な意見をいただいた。

委　員：先ほどある委員から世代ごとの考え方のすれ違いみたいなお話があったが、保護者と接している中、思いがあってもそれを具体的にどのように子育てに還元すれば良いのかがわからない方が多いと感じるので、最後には自分できちんと我が子に向き合っていけるような支援の仕方が必要だと思う。大切や必要だと思うことに「保護者がしつけや教育について相談できる場所をつくる」や「保護者が自分の子どもに対して、いじめをしてはいけないことをしっかりと教える」が多いとわかり、保護者の思いが伝わってきたので、正直安心している。

委員長：思いが伝わるのは嬉しい。

委　員：問 15 では 10 代、20 代に「子ども同士が、地域で遊び、スポーツ活動ができる機会をつくる」ことが必要であるとの回答が一番多かった。これを反映する回答として問 17 では同じく 10 代、20 代で多かった回答が「地域の子どもとかかわりはない」である。現実的には地域の子ども同士でのかかわりはないが、そうできる機会があれば一緒に遊んでみたいと思っているのだろうと感じた。

委員長：そういった機会づくりも考えていくべき１つの柱だ。他にないか。
それでは、次に進む。Ｐ32～Ｐ49 の「４．大阪狭山市の生涯学習・文化・スポーツなどについて」である。アンケート用紙に生涯学習の定義を載せたが、この結果を見て生涯学習に対する理解に少し違和感を覚えたので、あの定義は難しかったのかと個人的に思った。これも私の個人的な意見だが、狭山は図書館がとても良いと思う。狭山池中心の歴史的なまちづくりもすごいし、公民館活動や狭美会のような芸術文化活動がこのまちの中心かと思っていたらやはり結果でもそう出ていて、住民の方は良く見ていると感じた。

委　員：いくつになっても様々な趣味を持って頑張っている人がＳＡＹＡＫＡホールや公民館で発表する機会を多く持てて喜ばしい。

委　員：スポーツ活動をしている中でウォーキングも行っているが、狭山池で開催するときにはすごく人が集まる。やはり狭山池が狭山市民の中心になっていて、いつでも行けて誰もが集まれる場所になっていると感じる。狭山池周辺はスポーツ行事を通じて狭山市民が一体となれる場所ではないかと思う。

委員長：狭山池を１つのシンボリックなものとしてそこにいろいろなものが集まるという、計画に向けての新たな視点をいただいた。
次に進む。Ｐ50～Ｐ52「５．大阪狭山市への愛着や市の特長・誇りについて」であるが、何かあれば。

委　員：問 24 の「大阪狭山市の特長や誇りとして、大事にしていきたいと思うことはどのようなことですか」で、15~19 歳の多くが「日本最古である狭山池」を挙げている。私も狭山と言えば狭山池という思いがある。小・中学生時代に学習等を通じて狭山池と接する機会が多いからかもしれない。

委員長：他の箇所でも年齢の若い人たちは狭山池にすごく関心を持っている。ある種、若い人たちにとってのふるさとが狭山池と結びついているのではなかろうか。良い意味でイメージ化されているという印象を受けた。

事務局：平成２年にとったアンケートで大事にしていきたいと思うものは狭山池がダントツに高く、最新の平成 21 年のアンケートでも同様であった。だが、今回のアンケートでは安全・安心が狭山池を上回り、地震の前と後によってここまで安全・安心のニーズが高くなったのかと驚いている。

委員長：総合計画のデータから見て、今回は安全・安心がクローズアップされている点についての指摘であった。

委　員：問 24 で「市民協働のまちづくり」を大事にしていきたいと思っている人が 9.9%と、非常に少ないことがわかった。大阪狭山市は市民による協働を前面に出していたと思うのだが、それほどメインではなかったのか、なぜこの数字なのだろうかとショックを感じながらずっと考えていた。何か思うところはあるか。

委員長：市民協働は施策云々ではなく考え方だ。いろいろなことに入り込んでいる機能で、市民協働の考え方をベースにまちづくりをしていくわけだから、私はあまり気にならなかった。

委　員：全ての項目に市民協働が入っていると考えては。

委　員：それなら、これだけを表に出す必要はない。

委員長：いろいろな見方があると思う。

委　員：問 23 の大阪狭山市への愛着のところだが、８割くらいの方が愛着を感じていて、居住年数別を見ると住んでおられる期間が長い方が大阪狭山に対してより愛着心があるとわかった。私は河内長野市民だが、正直そこに対する愛着心はそれほどない。私は大阪狭山で仕事をしているので、むしろこちらのほうに愛着が湧いている。これから育つ子どもたちが愛着を持つような何かが大阪狭山にある気もするので、その辺りを提言していく必要があると感じた。

委員長：私は全国まちづくり研究会に所属しており全国いろいろなまちを回っているが、大阪狭山に匹敵するまちは京都市だ。京都では行政も含め皆が力を合わせてまちを愛している。そういう意味でも、この狭山は突出して良いまちだと思う。
では、次に進む。Ｐ53～Ｐ56「６．教育に関する施策全般について」の意見を求めたい。

委　員：問 25 では 60 歳以上の方の多くが「家庭の教育力を高めるための大人への教育」に力を入れるべきだと回答している。これも先ほど述べた保護者に対する高齢者の批判的な気持ちを反映しているのかと思った。

委　員：大人への教育が必要というのは、おじいちゃん・おばあちゃんが自分たちの子どもの世代に対してちゃんとしろと言っているだけだろうと思う。親にしてみれば、子どもはいつまでたっても未熟な子どもに見えるので、今の子育て世代が極端に悪いわけではないとフォローしておきたい。

委　員：保育の世界でも親を教育する親学というものがある。問題になっている部分もあるがこういう学問があるくらいなので、年齢の高い方が若い保護者に批判的なのもやむを得ないと思う。

委員長：親学が若い人に抵抗なく広がれば良い。

副委員長：教育行政の立場から言えば、子育て世代というのは 20～40 代だと思うが、この世代において「学校教育を充実させるための施策」に力を入れるべきだと思っている割合が意外と低く３位か４位くらいにとどまっている。むしろ「子育て家庭への支援」の割合が高くなっていることが、今の時代を反映しているように感じる。

委員長：私に言わせれば、学校教育がうまくいっているからではないか。学校教育に具体的な課題が多ければそこの割合はもっと増えると思うが、そうではなく満足なさっている印象を受ける。むしろ子育てに対する課題意識が高いのでは。

委　員：「子育て家庭への支援」というのは金銭面についてか。

委員長：答えた人の意識まではわからないが、支援というのはお金だけではないと思う。

委　員：先ほどから親がしっかりしなければならないと議論されているが、意外と子どもは見ている。問 14 の 15～19 歳の欄を見ると「子どもが保護者と一緒に、様々な体験ができる機会を増やす」「保護者が子どもに対する教育の方法や心がまえを学ぶ」「保護者がしつけや教育について相談できる場所をつくる」ことが必要だと思う割合が高く子育て世代の回答割合と重なっており、意外な感じがした。

委員長：面白いところだ。相談も大事な柱として取り上げなければいけないと思う。
それでは、全般に渡って意見をいただきたい。

事務局：子どもを学校に行かせている保護者の方は、何か問題があるときには学校や相談機関に助けてほしいと発信なさっているが、子どもがいない年齢や子育てが終わって、いわゆる学校と離れた方が客観的に見たときには家庭の教育力の大切さを強調された結果になっていると思う。この客観的な資料に基づいて家庭ですべきことはきっちりしていただきたいと言えるので、ちょうど良いデータになった。

委員長:一般行政としての家庭教育もあり、この問題に対する施策ができれば良いと思っている。

副委員長:「３・家庭教育・地域教育について」以降は、年代別に特徴が表れている項目と、特に生涯学習において顕著であるが年代にかかわらず思いが共通している項目がある。その両面を反映させることも必要ではないか。

委　員:家族構成で最も多いのが親と子の２世代世帯でおじいちゃん・おばあちゃんと住んでいない核家族というわけだ。だけど地域のおじいちゃん・おばあちゃんはもっと学べとおっしゃる。何か相談があれば聞こうと思っておられるだろうが、もしかすると相談できていないのではないか。子どもも親が他の人に聞けば良いのにと思っているが、親はどこにも相談できていない可能性が高い。そうすると、地域のおじいちゃん・おばあちゃんと子育て世代の方たちを結びつける何かが必要になってくるのでは。

委員長:それも計画に盛り込もう。

委　員:生涯学習のところだが、問 19 では生涯学習をしたことがあるかを聞いていて「ある」が 29.1%、問 20 では生涯学習の意向を聞いていて、「してみたい」と思っている方が約７割で、数値にかなりの差がある。子育て世代やお仕事が忙しい方でもできる仕組みづくりが必要ではないか。

委員長:総務省の過去 20 年間の統計では、生涯学習をした経験のある人が５割弱で、学ぶ意欲がある人は９割弱だ。どうすれば参加できる学びの場をつくれるか、という問題提起も入れていきたい。

委　員:問 26 にある「まちづくり円卓会議への活動支援」に力を入れるべきだと思っている人が非常に少ないが、走り出したばかりで生涯学習の要素もこれからどんどん取り入れようとしている円卓会議もあるので、よろしくお願いしたい。

委員長:まだ広がっていないと思う。これからだ。
それでは、今日の意見交換は以上にしたいと思う。
次回の会議予定について、事務局から説明をお願いしたい。

３．その他

今後のスケジュール

・次回会議予定について　平成 26 年５月中

４．閉会

以上